

『いわての川づくりシンポジウム 2009』を開催！

河川課

県では、昨年11月13日、盛岡市内で『いわての川づくりシンポジウム 2009』を開催しました。

本シンポジウムは、国土交通省の「中小河川に関する河道計画の技術基準」の策定の参考となった一級河川元町川（葛巻町）などを例に、これまで進めてきた“いわての川づくり”について振り返るとともに、川本来のあり方、川と地域との関わりについて考え、今後のいわての川づくりにつなげていこうとするものです。

いわての川づくりや、川を中心とした住民の方々の地域での様々な活動の様子を紹介したほか、川づくりの技術、地域との協同・連携について改めて考える機会となり、今後の本県の多自然川づくりがより一層促進されることが期待されます。

1 現場指導（一級河川馬淵川水系元町川）

1 講師／九州大学大学院工学研究院教授 （独）土木研究所自然共生研究センター長	島谷幸宏 氏 萱場祐一 氏
--	------------------

平成18年災一級河川元町川河川等災害関連事業（葛巻町）の現場において、計画段階からアドバイスをいただいたお二人を招き、竣工後の状況を確認しました。

現場では、元町川の現在の状況を踏まえながら、全国的に多自然川づくりの課題となっている事項等について意見交換を行ないました。



【現場指導における島谷教授、萱場センター長との意見交換より】

- 河床の石組みについて
 - ・ 元町川では施工段階で石組みを行っている。一方、宮崎県の山附川（H17 災害関連）は施工段階で石を組んでいないが、自然に石が絡んできている。ただ、水深が浅くなったとの報告もある。
 - ・ ステップアンドプールでは、プールで水面幅が広がる。広がったところで砂が溜まり、生物にとって重要な環境となる。
 - ・ 両河川を比較し、施工段階でステップアンドプールをつくるかつくらないかの検討が必要。
- 護岸について
 - ・ 護岸の明度（明るさ）については規制が必要。（明度が高ければ、明るく構造物の印象が強まってしまう）
 - ・ 護岸を空積み（コンクリートブロックの中詰めを碎石等で充填）にすることでコンクリート量が減り CO2 が半減。
 - ・ 洪水を防ぐためには、河畔林が必要という発想の川づくりに変えたい。

2 基調講演

演題：多自然川づくりの実践
講師：九州大学大学院工学研究院教授 島谷幸宏 氏

これまでの多自然川づくりの変遷、現在検討している多自然川づくりの最新情報など、全国で取り組まれている事例を交えながら講演いただきました。

今回の元町川での河道計画検討が、国土交通省が策定した「中小河川に関する河道計画の技術基準」の参考となったとのことです。



【基調講演より】

○ 護岸について

- ・ 護岸は侵食を防ぐための構造物、河岸は水際と陸域の接する部分。護岸と河岸は分けて考えよう。
- ・ 護岸は急勾配、河岸は緩傾斜。
- ・ 護岸は河岸の背後に引いて設置した方が、流速が抑えられる。川も自由に動ける。
- ・ 護岸の性能（景観、浸透性、覆土等）について、今後の検討課題。

○ 環境の評価（大分県の例）

- ・ 大分県では、魚の調査を統計的に整理し評価。魚を生息場所、産卵場所等の特徴ごとに分類。
- ・ 調査地点の魚の種類の数により、川づくりの課題が見える仕組み。

3 パネルディスカッション

テーマ：川づくりと地域の関わり

パネルディスカッションでは、パネリストの方々から、元町川のほか、宮守川、雪谷川等をはじめ、いわての川づくりについて高い評価をいただきました。

また、中津川、宮守川を中心とした地域での様々な活動の紹介があり、「改めて地域に親しまれる多自然川づくりの原点を感じることができた」などの意見が出され、今後の川づくりにとっても参考となる活発な討論となりました。



コーディネーター

島谷幸宏氏（九州大学大学院工学研究院教授）

パネリスト

萱場祐一氏（（独）土木研究所自然共生研究センター長）

寺井良夫氏（NPO法人もりおか中津川の会理事）

菅原伴耕氏（（農）宮守川上流生産組合理事）

佐藤 悟氏（岩手県県土整備部河川課総括課長）